

1. 参考文献

- ・「南君の金融日誌 居酒屋物語で金融入門」、日向野幹也、日本評論社、2003年
- ・「中小企業経営者のための銀行交渉術」、中村中、TKC出版、2002年

2. ベンチャー企業に対する期待

- ・日本の産業構造を転換させ、成長力・雇用吸収力を高めることが期待されている
米国のIT革命等をベンチャー企業が牽引 日本ではベンチャー企業の成功例が少ない
- ・特区構想、最低資本金規制の緩和などの政策対応も取られている

3. 起業に伴うリスク

- ・新しい企業が**当初見通しどおりの売上・収益を上げられるか？**
すぐに黒字になる企業は稀 「金融検査マニュアル」でも**創業赤字**を認めている
創業赤字の企業は、赤字が続いていても「正常先」とみなされる可能性
- ・収益率は顧客層の厚さ、同業他社の戦略、技術革新、規制の動向、品質、原価などに大きく依存
起業には、立地の悪化、他社との競合激化、技術の陳腐化、法律等による規制強化、不良品の大量発生、原価高騰などのリスクがつきもの なかなか当初の思惑通りには儲からない
少人数で起業した場合、リーダーの健康状態や後継者の有無が大きな問題となることも
- ・**会社を運営するには本業だけでなく、会計制度、税制、社会保険制度など幅広い知識が不可欠**
各種の違反が判明した場合、本業に悪影響を及ぼすことも 法令遵守が重視される時代

4. 起業家の資金調達時の苦労 信用はすぐには得られない

- ・担保となる**資産が少ない**うえ、将来の**収益力に関する不確実性**が高い
地価が上昇していた時には、不動産などを担保に起業することが今よりも容易だったが・・・
ビジネスモデルや特許など無形資産を評価するのは難しい：目利きをどのように養成？
- ・どんなに優れた技術を持っていても、「デスパレー」を克服できないことも
事業化するためには、販路の拡大などに少なからぬ資金を投下する必要がある
- ・**経営計画がないと資金調達は困難**：いつ黒字に転換し、次いで累積赤字を解消できるかなど
計画時点の信頼性がまず問われる 起業家は楽観的な見通しをたてがち
資金を調達できた後でも、経営計画と実績の乖離が問題にされる

5. 間接金融はベンチャー融資が苦手

- ・銀行等では「貸倒率 > 貸出金利 - 資金調達コスト」の場合、**採算割れの貸出**になる
ベンチャー企業の貸倒率は一般にかなり高い 高い貸出金利を適用する必要
民間銀行間の競争や公的金融機関との競合などに伴い、高い貸出金利を適用しにくい
- ・大成功した新興企業があったとしても、そこから得られる利益は金利に限定される
利息制限法で金利の上限が定められているため、リスクに見合った金利を取れないことも

6. 直接金融を用いたベンチャー投資への期待

- ・ベンチャーキャピタル等が**分散投資を行えば儲かる可能性**：大成功すれば投資の利益が大
「儲けた投資の利益計 > 損が出た投資の損失計」ならば儲け得る：**目利きの確保**が大切
- ・株式の**新興市場の整備**：証券取引所への上場基準を緩和、値上がり期待による投資を呼び込む
マザーズ(東証<99年>)、ヘラクレス(大証、当初はナスダック・ジャパン<00年>)など
- ・最低資本金規制の緩和(03年)：株式会社は1千万円以上 1円以上で可能(5年以内に増資)
などの政策対応 有限会社は3百万円以上 以上